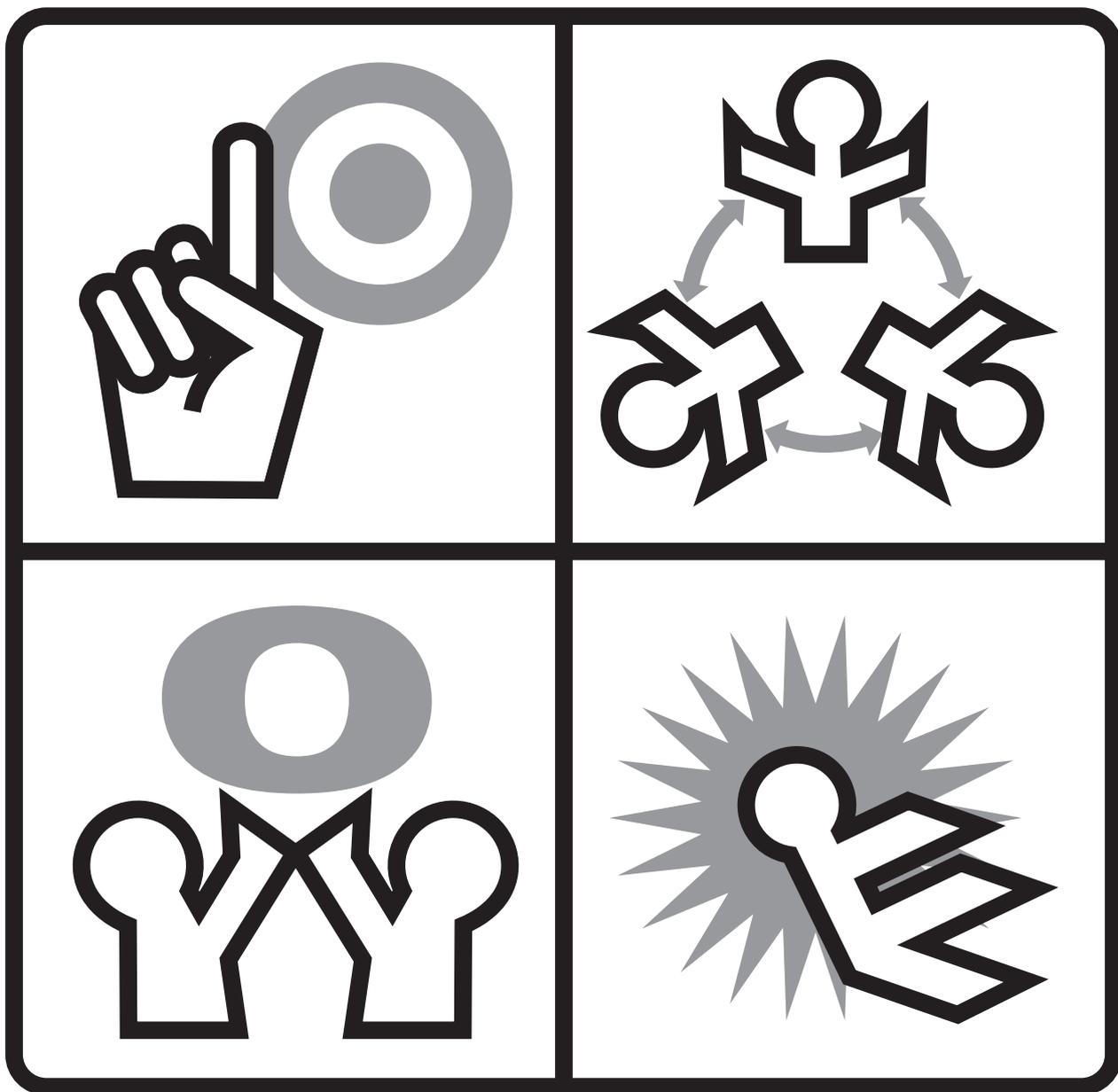


重大労災防止の行動指針



働く者の全員参加で
安全を築こう！

2009年6月



重大労災防止の行動指針

働く者の全員参加で安全を築こう！

目 次

重大労災防止の5つの行動（ダイジェスト）

仕事の前に確認しよう！仕事の合間に思い起こそう！…………… 2

はじめに — 重大労災防止の行動指針とは — …………… 4

重大労災防止の5つの行動指針！

1. 仕事を「見る」「見られる」ことを気にかけてよう！ …………… 6

2. 急ぐ時、慌てる時こそ一息置こう！…………… 10

3. 仕事を始める前にはよく考え、準備万端に！…………… 14

4. 危ないと思ったらすぐに行動！…………… 18

5. とくに危険な四大労災を撲滅しよう！…………… 23

5.1 触車事故を撲滅しよう！…………… 24

5.2 感電事故を撲滅しよう！…………… 26

5.3 墜転落事故を撲滅しよう！…………… 28

5.4 重大交通事故を撲滅しよう！…………… 30

1 仕事を「見る」「見られる」ことを気にかけてよう！（6 分）

●作業の指揮者や責任者の方へ

- ・作業者の安全の状態を見えていますか？ 仕事の内容を把握していますか？
- ・指示なく作業が進んでいませんか？ 作業に無理はありませんか？

●作業者の方へ

- ・あなたの安全は誰かに見られていますか？
- ・指示されたこと以外の仕事をしようとしていませんか？

●見張員の方へ

- ・見張こそ何よりも大切な仕事です！
- ・打ち合わせは万全ですか？ 列車順序や遅れは把握できていますか？
- ・わずかな不安も必ず確認、危険を感じたら列車を止めよう！



2 急ぐ時、慌てる時こそ一息置こう！（10 分）

●急ぐ時、慌てる時こそ一息置きましょう！

- ・たとえ仕事が遅れても、とにかく安全確保が最優先です

●「いつもやっていること」を一度疑って、決められた手順を確認してみてください！

- ・マニュアルや内規のルールと違っていませんか？
- ・まず決められた通りにやりましょう。
- 問題があれば改善を求めましょう！

●万一事故が起きたら同じ事故が起こる危険はありませんか？

- ・救護作業には注意して、周りからも声を掛けてください！



3 仕事を始める前にはよく考え、準備万端に！（14 分）

●仕事の前に段取りをつけ、自信を持って仕事を始めましょう！

- ・仕事の内容、自分の役割をしっかりと理解し、安全最優先で作業に着手しましょう！

●思い違いやミスをして、

事故につなげないためにどうすべきかを考えましょう！

- ・危険な芽はできるだけ摘んで、注意事項を集中化しましょう！

●始業や休憩後に事故が多発しています！

- ・仕事の始めに一息置いて、まず、作業の安全を考えましょう！



— 仕事の前に確認しよう！ 仕

5つの行動指針！

4 危ないと思ったらすぐに行動！（18 分）

●危険を感じたら列車を止めよう！ 仕事をやめよう！

- ・それは褒められる行為であり、絶対に責められることはありません。

●危険や不安を見たり感じたら、すぐにそれを伝えましょう！

- ・ヒヤリハットは積極的に報告してください！
- ・それは次の事故を防ぐ大切な情報です！



5 とくに危険な四大労災を撲滅しよう！

5.1 触車事故を撲滅しよう！（24 分）

●見張りは作業者の命綱！

- ・わずかな不安も必ず確認、危険を感じたら列車を止めよう！

●線路には必ず列車が来ます！

- ・線路の横断や線路内への立入時には、まず確認、とにかく確認！



5.2 感電事故を撲滅しよう！（26 分）

●必ず停電を確認！ 停電だと指示されていても間違えることはあります！

- ・絶対に検電・接地をしているかを確認しましょう！

●活線近接作業では、停電箇所と通電箇所をしっかり確認！

- ・通電箇所には絶対に触れてはいけません！
- ・感電防止の絶縁用保護具と安全帯を正しく装着しましょう！

●「見る」「見られる」ことを気かけよう！ 危険を感じたら作業を止めよう！

5.3 墜転落事故を撲滅しよう！（28 分）

●保護具・安全帯は正しく装着を！

- ・事故はロープの架け替え時に発生します。移動する時には絶対注意！
- ・補助ロープ（命綱）で常に身体を守ってください！
- ・「見る」「見られる」ことを気かけよう！ とくに安全帯の相互チェックを

●危険を感じたら作業を中断！ 危ないままで仕事を続けてはなりません

5.4 重大交通事故を撲滅しよう！（30 分）

●徹夜明けが眠いのは当たり前！

- ・眠気を我慢しないで、とにかく休もう！
- ・スピードは控えめに、安全最優先で！ 悪天候はとくに運転に気をつけよう！

●一人より二人、声を掛けたり交代したり、居眠り防止が大事です！

はじめに

重大労災防止の行動指針とは

J R 連合は、2005 年 4 月 25 日の J R 福知山線列車脱線事故をはじめ、尊い人命を奪う重大事故を相次いで発生させてしまったことについて、チェック機能を発揮できず、事故を未然に防げなかった労働組合も責任を共有するとの認識に立って、安全確立を最重要課題に位置づけて運動を展開してきました。2006 年 5 月には、安全確立にむけた私たちの姿勢と行動指針をまとめた「安全指針」を策定し、その浸透、実践に務めてきています。J R 連合は、引き続き、その認識と姿勢を堅持し、二度と悲劇を繰り返さず、J R の信頼を回復させるために、安全を最優先して真摯な取り組みを着実に進めていくこととします。

「すべての J R 関係労働者の死亡事故・重大労災ゼロ」の完遂を

そして、2008 年度より、働く者の安全を確保することが、ひいては鉄道全体の安全性向上につながるとの認識に立ち、J R、グループ会社、協力会社のすべての社員を含めた取り組みとして、「すべての J R 関係労働者の死亡事故・重大労災ゼロ」を最重点テーマに掲げて活動を開始しました。

私たちの仕事は常に危険と隣り合わせにあり、今なお、作業者が触車や感電などの労災で死傷するという痛ましい事故が続いています。最近では、2008 年 9 月に J R 東日本で感電による死亡事故、重機に挟まれての死亡事故、2009 年 2 月に J R 西日本で触車による死亡事故が発生しました。いずれも協力会社の社員が犠牲となっています。

働く者の全員参加で安全を築こう

J R 連合は、企業や組合など所属や立場の違いを超えて、働く者の全員参加で、お互いに力を合わせて職場からの安全を築くことが大切だと考えます。安全の確立は、本来、企業側から押し付けられるものではありません。自分や仲間の命や身体を皆で守っていくことが重要です。J R 連合の組合員はもとより、協力会社の社員の皆さんも含め、組合員以外の方々にも、安全を確立するための運動に参加いただきたいと思えます。

J R 連合はこうした問題認識から、「すべての J R 関係労働者の死亡事故・重大労災ゼロ」の運動の第一歩として、まず、職場における重大労災を撲滅するために、この「重大労災防止の行動指針」を策定しました。この指針は、あくまでも働く者の立場に立って策定し、仕

事の前や、合間で一息ついた時などに確認し、作業を進める際に活かしていただきたい事項をまとめたものです。

重大労災を防止するための視点

事故があると、「基本動作の徹底」「禁止事項・遵守事項の徹底」などの防止策が会社から防止策が示されます。もちろんこれを否定するものではありませんが、個人を責めたり、作業者の注意喚起を強調するだけでは、事故の抜本的な防止には絶対につながりません。

J R連合は「誰でも必ずミスを冒す」「人間はいくつも注意することはできない」「ヒューマンエラー（人間のミス）は結果であって原因ではない」との認識に立ち、起こってしまった結果を直視して、「いかにミスを減らせる環境をつくるか」「たとえミスをしても重大労災に至らないしくみをつくるか」との視点から、皆さんに「重大労災防止の行動指針」を訴えるものです。

「指針」を活かして安全を築く運動を！

この「指針」は命令や強制といった性格のものではありません。働く仲間の視点から、皆さんにぜひ考えていただきたいこと、実践していただきたいことを提起するものです。仕事のうえでの安全の「目標」や「ヒント」として捉え、仲間の皆さんで、その内容を参考に安全について話し合ってみてください。

それぞれの指針の説明の中では、実際に発生した重大労災の事例を紹介しています。人間は誰でもミスを冒すものであり、同様の事故に遭遇する危険は常に存在しています。働く仲間がお互いにその危険を減らし、少しでも事故を防止していこう、という趣旨で作成したものです。安全は押し付けられるものではなく、所属や立場を超えて、自分や仲間の命や身体を皆で守っていくことが重要です。協力会社の皆さんなど、J R連合の組合員以外の方々にも、運動への積極的な参加をぜひ呼び掛けたいと思います。

そして、この運動を通じて、日頃から危険や不安を感じている事象（ヒヤリハット体験など）や、企業側に改善を求める課題、例えば、要員の体制、作業の内容、作業の時間や工期、委託費の単価、教育・訓練の内容などについて、J R連合の組合を通じて実態や意見を集約し、少しでも解決、前進させていきたいと考えています。

現場で働いている方々が参加して運動していかなければ、職場からの安全の確立にはつながりません。「重大労災防止の行動指針」を活用し、所属や立場を超え、働く者の全員参加で安全を築いていきましょう！

重大労災防止の5つの行動指針！

1

仕事を「見る」「見られる」ことを 気にかけてよう！



仕事の前に確認しよう！仕事の合間に思い起こそう！

●作業の指揮者や責任者の方へ

- ・ 作業者の安全の状態を見えていますか？ 仕事の内容を把握していますか？
- ・ 指示なく作業が進んでいませんか？ 作業に無理はありませんか？

●作業者の方へ

- ・ あなたの安全は誰かに見られていますか？
- ・ 指示されたこと以外の仕事をしようとしていませんか？

●見張員の方へ

- ・ 見張こそ何よりも大切な仕事です！
- ・ 打ち合わせは万全ですか？
列車順序や遅れは把握できていますか？
- ・ わずかな不安も必ず確認、
危険を感じたら列車を止めよう！





なぜ必要なのか、何をするのか

線路内や線路に近接した場所、あるいは電気の通っている活線や活線に近接した場所での作業、高所での作業、車両所や変電所などの危険箇所における作業で発生している事故の多くは、「誰も見ていなかった」「知らないうちに作業をしていた」など、責任者や同僚も知らないままに、ある作業者が単独で、作業指示の内容とは別の作業をしたり、入ってはならない箇所に立ち入ったりすることによって発生しています。

決められた手順で作業が進まなかったり、たまたま不具合を発見して、よかれと思って行った作業で命を落とすケースも発生しています。見張員の方が作業を手伝って事故に遭遇したケースも起こりました。

人間は必ず思い込みや勘違いをします。「どうして勝手なことをした！」と注意するだけでは絶対に事故はなくなりません。誰でも同じような立場になる可能性は大いにあります。むしろ、誰もそうした行為をしているのであって、たまたま事故になっていないだけだと考えましょう。

こうした事故を防ぐためには、単独では仕事をしないこと、自分の仕事が安全に進んでいるかを誰かが見ていて、危険を感じたら注意してもらおう作業環境をつくること、見張員や監督員を担当する方は、どんなに忙しくても作業を手伝わないこと、絶対に別の仕事をしないこと、自分の役割に専念することなど、作業に没頭してしまう前に、安全に仕事のできる環境になっているかを確認することが大切です。作業に集中すると、安全のことを忘れてしまいます。たとえ思い違いをしても、事故にはつながらないように、事前に環境を整えておくことが必要です。

仕事を見られることは、自分がチェックされているようで嫌な気もしますが、「安全が保たれているか」を見てもらっていると考えましょう。作業指揮者や責任者の側も、何よりも「安全に仕事が進んでいるか」を見るのだと認識してください。

●指揮者・責任者の皆さんは、作業の安全を見守ってください！

- ・工事指揮者、作業責任者などの責任者の方は、作業者が理解、納得できるよう作業内容を説明し、作業中は、安全が保たれているかを見てください。
- ・危険を感じたり、指示の内容から外れた作業を行おうとしているような場合は、直ちに注意し、作業を止めてください。
- ・責任者と作業者の間で、作業の内容や安全の状態について、随時、相互に確認し合ひましょう。見ること、見られることを気に掛けましょう。

●作業の方は責任者が指示した作業内容に徹しましょう！

●あなたの仕事を「誰も知らない」「誰も見ていない」状況が一番危険です！

- ・作業の方は、指示された仕事以外のことを断りなく行ってはいけません。自分の仕事の安全を、責任者や他の作業員に見てもらっているかどうかを意識してください。とくに、グループから外れて単独で仕事をするのは絶対に止めましょう。
- ・不具合を発見し、予定外の作業を指揮者や責任者への断りなく行ったり、予定通りに作業が進まず、隣の線路に立ち入ったり、架線の電柱に上ったりすることで事故が発生しています。
- ・仕事に没頭すれば、いちいち安全のことを考えられなくなります。不具合が発生した場合などには、面倒でも、まず、責任者にそのことを伝え、必ず指示を受け、安全を確認してください。

●見張員や監督者は一番大切、その業務に専念してください！

- ・見張や監督の業務を担当したら、どんなに忙しくても、同僚などから頼まれても、作業を手伝ってはなりません。他の作業員も手伝いを頼んではいけません。
- ・その役割をしっかりと果たすことが責任です。作業員は見張員を信頼し、安全を託しています。最も重要な仕事であると認識してください。
- ・作業や列車運行に安全に支障する変更や齟齬そごが生じたときは、ためらうことなく列車を止めたり、作業を中止させましょう。



抜本的な問題解決にむけて

そして、抜本的に事故を撲滅するためには、列車が来る危険のある中での作業はしない、活線に近接したところでの作業はしない、墜転落の危険のある高所での作業はしないなど、危険な作業環境自体をなくすべきことは言うまでもありません。直ちに改善することは難しい課題もありますが、JR、グループ会社、協力会社の皆さんが立場を超えて問題点を指摘し、要望を提起していくことが大切です。



過去にはこんな悲劇が発生しています！

事例 1 A線における感電死亡事故



当該の作業員は、夜間作業で、電柱上のビームの不要配管を撤去していました。架線（トロリー線）は停電していましたが、電柱上の高圧配電線は、片側は停電、もう片側は通電状態にありました。もともと通電側での活線近接作業の予定はなく、電気作業用の保護具は着用していませんでした。通電箇所・停電箇所の確認も不十分だったといえます。

作業員は停電している高圧配電線側の電柱上から配管を引き抜こうとしましたが、管が途中で抜けたため、反対側の電柱に上り、そこで高圧配電線からの引下げ線に触れて感電し、命を落としてしまいました。なお工事指揮者は、この動きを知らなかった。

事例 2 B駅構内における触車死亡事故

当日は、ある線区の下り線で、マルチプルタイタンパー（マルタイ）による総つき固めの夜間作業を、5人のグループで行っていました。地上作業員であった当該の作業員は、マルタイのオペレーターに対し、地上から線路上の支障物等の指示を行っていました。

B駅構内に入り、ホームがあったため、この作業員は、支障物の確認をするために、反対側の上り線の線路内に入ってしまった。しかし、隣接する上り線は線路閉鎖の手続きはしておらず、列車が来る危険がありました。なお、作業責任者は別の作業員とともにホーム測定を行っており、当該者の動きは見えていませんでした。

明け方で列車のほとんどない時間帯でしたが、この作業員が上り線の線路内で作業しているところに、列車が進来して触車し、命を落としてしまいました。

2

急ぐ時、慌てる時こそ一息置こう！



仕事の前に確認しよう！仕事の合間に思い起こそう！

- 急ぐ時、慌てる時こそ一息置きましょう！
 - ・たとえ仕事が遅れても、とにかく安全確保が最優先です。
- 「いつもやっていること」を一度疑って、決められた手順を確認してみてください！
 - ・マニュアルや内規のルールと違っていませんか？
 - ・まず決められた通りにやりましょう。問題があれば改善を求めましょう！
- 万一事故が起きたら 同じ事故が起こる危険はありませんか？
 - ・救護作業には注意して、周りからも声を掛けてください！





なぜ必要なのか、何をするのか

作業時間が限られる中で、仕事を間に合わせるために急いだり慌てたりするのは当然のことです。しかし、急ぐ時や慌てる時にこそ、事故が多発していることも事実です。

作業を行うために必要な手続きや作業の時間は決まっています。安全をおろそかにしてまで急ぐ必要はありません。少しでも早くやろうとして、決められた手順を守らなかったり、所定の仕事が終わらないうちに、誰にも断らずに、単独で次の仕事の段取りに取り掛かって事故に遭遇したケースもあります。清掃作業では、「慌て作業」によって手足を挟まれたり、骨折するなどの労災が多く発生しています。

「急ぐな」「慌てるな」と言っても、作業の最中に、「慌てないようにしよう」と気を留めるのは不可能です。まず、作業前に、あるいは作業の合間に一旦立ち止まって、安全の確保を考えましょう。そして、一人で焦らず、誰かに相談したり助けを求めること、作業責任者から、節目節目に慌てるよりも安全を最優先するよう伝えることなどが必要です。また、次の段取りをする場合は、必ず責任者に断り、指示を受けてください。

●「慌て作業」「急ぎ作業」時にこそ立ち止まらしましょう！

- ・慌てたり急いだりすると、ミスを冒す危険が確実に高まります。
- ・まず、作業前に一旦立ち止まって安全確保を考えましょう。また、作業責任者の方は、節目節目に慌てなくてよいことを伝えましょう。
- ・作業工程上で、次の段取りに取り掛かる際などには、必ず責任者に伝えて指示を仰ぎ、安全を確認しましょう。

また、誰しも効率的に、少しでも楽に、少しでも早く仕事を進めたいと思うのは当然のことです。例えば、指定された通路は遠回りだから使わない、減多に列車が来ないからいちいち確認しなくてもよい、高所から降りるのが面倒だから車両の屋根上や電柱上のビームを伝って移動しているなど、何かしら思い当たることがあるのではないのでしょうか。「ルールを守れ」と言われても、「そんなことは誰でもやっている」「事故が起こっていないのに何が悪い」と感じるでしょう。経験の浅い方は「それが正しいやり方だ」と信じているかも知れません。ベテランは「俺が正しい」と自信を持っているかも知れません。

しかし、まず、効率的かどうかは別にして、マニュアルや内規でどのように定められているかを確認し、危険が潜んでいないかを考えてみましょう。実際に、そうした「近道行為」

が原因で、重大労災が発生しています。事故が起きてからでは遅いのです。

●作業手順やルールを再確認してみましょう！「近道行為」には危険が潜んでいます！

- ・いつもやっている作業手順は、マニュアルや内規で定められた内容に合っているかを確認してみましょう。
- ・決められた手順を飛ばす、確認すべきことを確認しない、指定通路を通らないなど、いわゆる「近道行為」には、必ず危険が潜んでいます。

このほか、感電事故や触車事故が発生した際に、一步間違えば、救助者も二次災害に巻き込まれる危険が高かったようなケースもあります。緊急事態に落ち着いて行動することは非常に困難ですが、触車や感電などの危険はないか、しっかりと確認することが非常に重要です。周囲の気付いた者が注意することも必要です。さらに、それぞれの職場で起こり得る危険を想定して、万一の時はどう対処するかを明確にし、関係者が共有しておくことも大切でしょう。

●救助する者が二次災害に遭わないために！

- ・事故や労災が起こった時こそ、救助にあたっては落ち着いて行動しましょう。周囲の者が注意することも必要です。
- ・後続列車や、反対側からの列車が来る危険はありませんか？
- ・事故現場には、まだ電気が流れている危険はありませんか？
- ・日頃から、万一の事故の際にどう対処するかを明らかにし、皆で共有することが必要です。



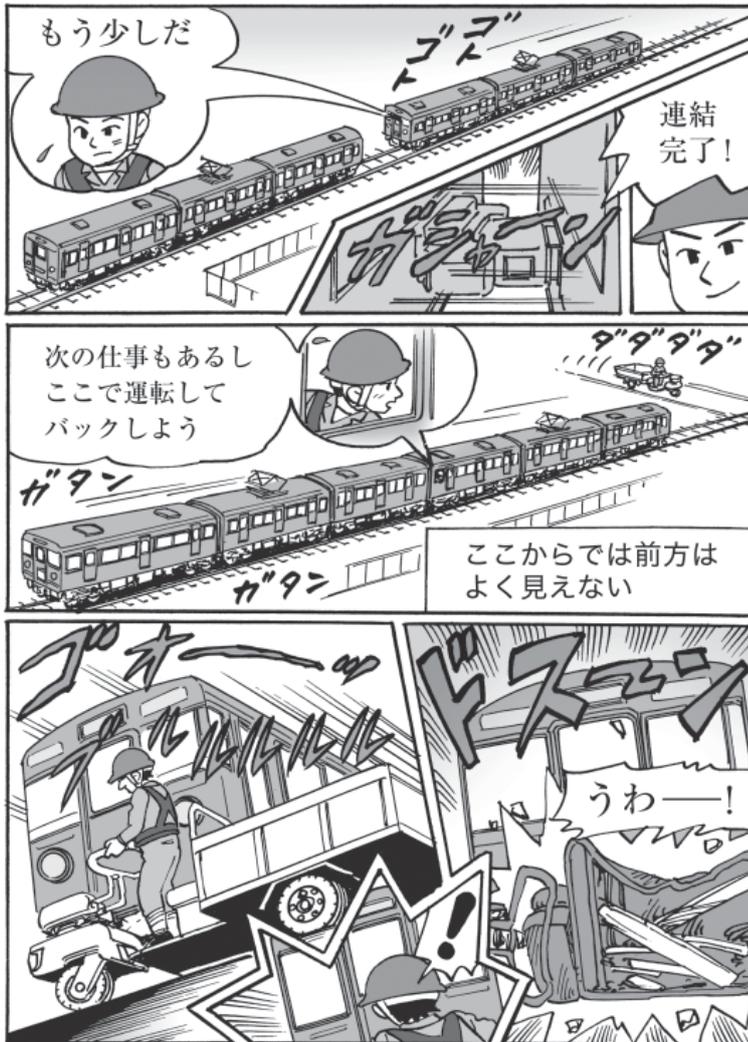
抜本的な問題解決にむけて

「慌て作業」や「急ぎ作業」においても、労災を防止するために取り組むことが重要ですが、そもそも、そうした危険な作業をなくすこと、原因となっている環境を改めることが必要です。たとえば、電気系統では、作業時間や工期に追われ、きわめて厳しい工程での作業が行われているケースが多くなっています。そもそも、作業時間や工期、工程に問題がある場合は、仕事のやり方や要員体制などを見直すよう、抜本的な改善を求めていかなければなりません。また、面倒でも、安全最優先で所定のルールを守るのが基本です。しかし、守れないルールや設備は改めるべきです。そもそも、作業者が守りにくいと感じるルールは長続きしません。現場の意見を集めて、現実にはそぐわないルールの見直しや、必要な設備改善も求めていくことが必要です。



過去にはこんな悲劇が発生しています！

事例 3 C車両基地構内における触車死亡事故



構内運転士は3両編成の電車を別の3両編成の電車と連結した後、反対側へ引き上げる入換作業を行っていました。連結後、本来は先頭車の運転台に移動して運転すべきところ、後の作業も気になって、中間の運転台から、前がよく見えない状態で推進（バック）運転により電車を動かしてしまいました。

この電車が動いた先の構内通路には、ちょうど清掃作業員が運転するゴミ収集用の三輪自動車が近づいていました。そして、この電車と、一旦停車をせずに線路上を通過しようとした三輪自動車とが出会い頭に衝突し、作業員は命を落としてしまいました。

事例 4 D駅構内における触車死亡事故

当日は、D駅構内の副本線である上り1番線のマクラギ更换の施工後、上り線の線路閉鎖手続を行ったうえで、上り本線と上り1番線の分岐器の細密検査を行う予定でした。

線路閉鎖工事担当者であった当該の作業者は、マクラギ更换の作業に従事していましたが、次の線路閉鎖工事の事前打合せのために、作業グループから離れて作業箇所である上り線に移動し、線路内で携帯電話にて輸送指令と電話をしていました。自分の担当作業が気になっていたものと思われます。この作業者の動きを、責任者を含めて他の作業者は誰も把握していませんでした。

そして、打合せの電話に没頭していた作業者は、列車の進来に気付かず触車し、命を落としてしまいました。

3

仕事を始める前にはよく考え、 準備万端に！



仕事の前に確認しよう！仕事の合間に思い起こそう！

- 仕事の前に段取りをつけ、自信を持って仕事を始めましょう！
 - ・仕事の内容、自分の役割をしっかりと理解し、安全最優先で作業に着手しましょう！
- 思い違いやミスをしても、事故につなげないためにどうすべきかを考えましょう！
 - ・危険な芽はできるだけ摘んで、注意事項を集中化しましょう！
- 始業や休憩後に事故が多発しています！
 - ・仕事の始めに一息置いて、まず、作業の安全を考えましょう





なぜ必要なのか、何をするのか

作業の内容や流れ、安全確保の状況などがわからないままに仕事を始めるのは非常に危険です。事前の打合せのミスなどで、停電していると指示された箇所が、実際には通電していたうえに、検電・接地を行わなかったために感電事故が発生してしまったり、単線で次の列車の来る方向を間違えて理解していたために触車事故に遭遇してしまったりするケースが起っています。とくに、始業時や昼休憩後など、作業に着手した時に、こうした事故が多く発生しているのが実態です。

自分の役割と段取りをよく理解して、自信を持って仕事に臨むことが重要です。仕事に自信があれば、たとえアクシデントが発生しても、少しでも落ち着いて対処できるはずです。また、仕事の着手時にこそ、必要な手続を確実に行うよう心掛けましょう。上記の例では、たとえ停電だと認識していても、電力作業の基本である検電・接地を行っていれば、労災にはつながらずに済んだはずで

す。このほか、どの職場でもKYT（危険予知トレーニング）などを行っていますが、マンネリ化、形骸化してしまっているとの指摘があります。人間が複数のことに注意するには限界があります。ある箇所に注意すれば、その他は不注意になると言っても過言ではありません。

安全を確保するには、自分からその日の作業上の危険を考えて、本当に危険な箇所や作業に注意を払うこと、それ以外の箇所や作業に対しては、万一、思い違いやミスをしても、少なくとも事故につながらないように、段取りを整えておくことなどが大切です。

とにかく、仕事に不安を感じたら、一旦、落ち着いて考え、仕切り直してみましょ

●作業に着手する時は、作業の安全を再徹底しましょう！

- ・始業時や休憩後など、作業に着手する時に、事故が多発しています。
- ・作業の内容や手順を、理解できるまでしっかり確認しましょう。そして、検電・接地など、決められた手続は着実に行ってください。手続に不安がある時は、必ず聞いて確認しましょう。安全だと言われても、確認を怠ってはなりません。
- ・指揮者や責任者の方は、作業者にわかりやすく指示、説明をしましょう。口頭だけでなく、図や書面で示し、わからないことは質問を受けて理解、納得を深めましょう。

●自ら危険を考え注意や段取りの再確認をしましょう！

- ・待ち受けのKYTでは頭に入りません。その日の作業で危険だと思うことを、自分で考え、どこに注意すべきかを確認してみましょう。
- ・JRにおける四大労災は、「触車」「感電」「墜転落」「交通事故」です。実際に死傷事故が繰り返し発生しています。自らの仕事の危険をよく見渡し、仕事に没頭してしまう前に、事故防止のために、段取りや注意の集中化をしておきましょう。

●事前準備を確実に、自信を持って仕事に取り掛かりましょう！

- ・不安を持って仕事に取り掛かることは非常に危険です。反対に、作業に自信があれば安全性は確実に高まります。
- ・作業前に、その日の仕事の段取りを考えて、事前の準備をしっかりと行いましょう。



抜本的な問題解決にむけて

このように、作業者が仕事の前に万端に準備を整えておくことは、事故防止や安全確立のために非常に有効です。しかし、重大労災を撲滅するためには、上記の感電事故や触車事故のように、JRとグループ会社との作業計画策定にあたっての打合せや、指令と見張員との列車確認のあり方、見張員の体制など、作業体制の安全確保について、ハード面、ソフト面での対策を講じることがきわめて重要だといえます。

列車接近警報装置など、安全を支援するシステムも充実されてきましたが、「人間はミスをする」ことを前提に、こうした対策をさらに充実しなければなりません。JR連合は、このような対策の強化を積極的に求めていく方針です。



過去にはこんな悲劇が発生しています！

事例 5 E 駅構内における感電死亡事故



当日はE駅構内で停電手配により碍子取替作業を行う予定でした。工事指揮者は、事前にJR側と停電手配の打合せをした後に作業計画を一部変更しましたが、これがJR側にうまく伝わっていませんでした。工事指揮者は変更した作業箇所は停電していると思い込み、当該の作業者に指示しました。図面にも停電の印が書かれていましたが、実際には、その箇所は通電状態にあったのです。

誰もが停電と認識し、検電・接地も行われませんでした。そして、作業者は停電していると思って通電中の架線に触れ、感電して命を落としてしまいました。隣の作業者が救助活動を行った間も通電状態のままであり、一歩間違えば二次災害の危険もあったといえます。

事例 6 F 線における触車死亡事故

当日はグループでF線（単線区間）で軌道のムラ直し作業を行っていました。作業箇所の見張りは、列車の進来方向に配置する先方見張員1名と現地見張員1名の体制でした。

午前の作業を終え、昼休憩の後、作業責任者は輸送指令に運転状況を確認しました。所定ダイヤでは「下り→上り」の列車順序が、遅れのために行き違い駅が変更となり、「上り→下り」の順になっていました。

現地に着いた時、すでに上り列車は通過していましたが、作業責任者は、先に上り列車が来るものと思い、先方見張員を上り方向に配置して、作業を開始しました。そこに見張員のいない方向から下り列車が進来したため、作業員が触車し命を落としてしまいました。

4

危ないと思ったらすぐに行動！



仕事の前に確認しよう！仕事の合間に思い起こそう！

- 危険を感じたら列車を止めよう！ 仕事をやめよう！
 - ・それは褒められる行為であり、絶対に責められることはありません
- 危険や不安を見たり感じたら、すぐにそれを伝えましょう！
 - ・ヒヤリハットは積極的に報告してください！
 - ・それは次の事故を防ぐ大切な情報です！





なぜ必要なのか、何をするのか

現場の仕事の中で、程度の差こそあれ、危険を感じる体験をされることが少なからずあると思います。しかし、作業を遅らせてはならない、叱られるかも知れない、などと心配して、危険や不安を放置したままで仕事を進めたり、後から、そうした事象を報告しなかったりすることも多いのではないのでしょうか。

しかし、危険や不安を放置することは、時には、重大な事故につながる危険があります。例えば、見張員の無線機が故障し通話ができない場合は、躊躇なく列車を止めなければなりません。列車を止めるのは勇気のいることですが、人命を守り安全を確保する賞賛すべき行為であり、絶対に責められることはありません。乗務員の非常ブレーキや防護無線の発報なども同様です。作業上の危険を想定し、いざという時に決断できる心構えを持つことも重要です。

JR連合は、安全を優先する行動とそれを行った方を高く評価します。会社も当然に同様の認識を持つはずです。私たちは、働く者を必ず守る、という姿勢を明らかにしておきます。また、危険や不安を感じたまま作業を続けてはなりません。一旦、作業を中断して、安全を確保したり、不安を解消してから、自信を持って仕事に臨んでください。指揮者や責任者に相談することも大切です。

いかなる場合であっても、安全のために列車を止めたり、作業を中断したりする行動は、高く評価される重要な対策だと確信してください。所属や立場には関係ない、安全を守る大切な行為です。

●危険を感じたら、ためらわず列車を止めてください！

- ・安全最優先の行為は褒められることです。見張員や責任者の決断は重要であり、予め危険を想定して心構えを持っておくことも大切です。
- ・危険を感じたら、勇気を持って列車を止めましょう。

●危険や不安を感じたら作業を中断してください！

- ・危険を感じたり、不安を持ったままで仕事を続けることは非常に危険です。
- ・わからないこと、確認したいことは、臆せず、責任者などに聞きましょう。
- ・一旦、作業を中断し、安全を確認し、自信を持って作業に臨みましょう。

また、日頃の作業で危険や不安を感じることを指摘したり報告したりすることも非常に重

要です。会社の所属、年齢、立場の違いなどが原因で、やりづらいケースがあるかも知れません。JRやグループ会社の若い工事指揮者が、協力会社のベテラン社員に注意しにくいというケースもあるようです。しかし、安全確保のためには、そうした垣根を取り払い、勇気を持って指摘し、また、指摘を受けた側も素直に受け入れる姿勢が必要です。

また、どの職場でもヒヤリハット体験などを報告するしくみがあると思います。仕事が終わったら、その日の作業を振り返り、ヒヤリハットを積極的に報告してください。その報告が次の事故を防ぐ大事な情報となることもあるはずです。

また、職場で対処できることは、直ちに改善を求めましょう。事故や労災が起こってからでは遅いのです。

●立場や所属を超えて危険や不安な事象を指摘しましょう！

- ・危険や不安を感じたら、直ちに指摘し、不安全な行為を止めましょう。
- ・安全確保のためには、年齢や経験、会社の所属や立場の違いは関係ありません。
- ・危険を指摘されたら、直ちに作業を中断し、安全を確保してください。安全を守ってもらったことに感謝し、指摘を素直に受け入れてください。

●ヒヤリハットは積極的に報告を！解決できることは直ちに改善を求めましょう！

- ・人間は誰でもミスを冒します。ヒヤリハットは積極的に報告しましょう。
- ・ヒヤリハットの報告は褒められる行為であり、その報告が次の事故を防ぎます。JR連合は積極的な報告を推奨し、高く賞賛します。
- ・ヒヤリハットの中で、職場で対処できる課題は、直ちに改善を求めましょう。



抜本的な問題解決にむけて

「危険を感じたら列車を止める」「作業を中断する」「ヒヤリハットを積極的に報告する」という行動指針の実効性が上がるかどうかは、働く者の側以上に、会社の姿勢が問われる課題だといえます。安全対策と作業の効率性や利益の確保とは、必ず背反する面があります。安全最優先の姿勢を徹底するためには、会社トップから、一貫して、その姿勢を示す必要があります。安全最優先で列車を止めたことが高く評価されなければ、作業者が勇気を持って行動できるはずはありません。その時は結果的に事故にならなかったとしても、いつかは必ず大事故につながる危険があります。ヒヤリハットの報告についても、それを褒めるとともに会社施策に機敏に反映し、直ちに改善できなくても経過を報告するといった反応がなくては、「報告しても変わらない」と諦め感が蔓延してしまいます。

JR連合は、真の安全風土や安全文化を確立するために、全力で取り組む方針です。もし、会社が個人の安全最優先の姿勢を責めるようなことがあれば、組合に連絡してください。組合としても要望や問題点を集約し、労使の協議や交渉を通じて、その改善に努めていく方針です。



過去にはこんな悲劇が発生しています！

事例 7 G車両基地構内における転落事故



当該の作業員は、雨の中、基地構内で電車の仕業検査で屋根上のパンタグラフとワイパーの検査をしていました。

架線（トロリー線）に安全帯のロープを架けて作業していましたが、運転台の前面ガラスのワイパーを点検する際、ロープが短く体が引っ張られるため、ロープのフックを点検台に架け直そうとしました。運転台の前は狭くて滑りやすく、危険な状態にありました。フックを外して架け直そうとした時、作業員はバランスを崩し、転落して骨折してしまいました。

事例 8 H駅構内における触車事故

当該の作業員は、1人で構内に留置する電車の車内清掃を行った後、トイレ清掃に向かう予定でした。当日、この電車の到着が遅れ、作業員は急いで作業をしていました。

作業員は、電車の端の昇降台から出て階段を降りる際、台の下にあるゴミ箱に空き缶があるのを見て、ゴミ袋に拾い入れました。このゴミ箱は、運転士が車内で収集したゴミを入れるもので、作業員の担当ではありません。作業員は以前から同様のことを行っていたのですが、管理者はこのことを知りませんでした。留置線の間隔は狭く、ゴミ箱に手を伸ばすと、身体が隣接する線路に支障し、たいへん危険な状態にありました。

所定ダイヤでは、隣接線に列車が来ることはありませんが、この日は清掃作業が遅れていたために昇降台下のゴミの回収中に回送電車が入線し、作業員は触車し骨折してしまいました。

5

とくに危険な四大労災を撲滅しよう！ ＜触車・感電・墜転落・交通事故＞

- 5.1 触車事故を撲滅しよう！
- 5.2 感電事故を撲滅しよう！
- 5.3 墜転落事故を撲滅しよう！
- 5.4 重大交通事故を撲滅しよう！



5.1 触車事故を撲滅しよう！



仕事の前に確認しよう！仕事の合間に思い起こそう！

- 見張りは作業者の命綱！
 - ・わずかな不安も必ず確認、危険を感じたら列車を止めよう！
- 線路には必ず列車が来ます！
 - ・線路の横断や線路内への立入時には、まず確認、とにかく確認！



なぜ必要なのか、何をするのか

まず、線路内作業で最も重要なのは見張員の役割です。先方見張員と現地見張員との確認が不明瞭で事故が発生したケース、見張員自身が作業を手伝って隣接する線路の列車に触車したケースなどが発生しています。長時間にわたって列車の進来を看視し続けるのはつらい仕事ですが、それが一番大切な仕事なのです。

●見張員や監督者は一番大切、その業務に専念してください！

- ・見張や監督の業務を担当したら、どんなに忙しくても、同僚などから頼まれても、作業を手伝ってはなりません。他の作業員も手伝いを頼んではいけません。
- ・その役割をしっかりと果たすことが責任です。作業員は見張員を信頼し、安全を託しています。最も重要な仕事であると認識してください。

また、作業が始まれば、それに必ず没頭してしまうものです。次の段取りなどを考え、誰も知らないうちに、一人でふらっと線路に立ち入ってしまうようなケースもあります。線路内の作業は必ずグループで行い、無断で持ち場を離れないようにしましょう。

●線路内作業では、見張員や責任者の目の届く範囲で、グループで作業しよう！

- ・無断でグループを離れてはなりません。必ず責任者の指示を受けましょう。

そして、列車を確認せずに線路を横断したり立ち入ったりして事故に遭うケースが後を絶ちません。これは、新人でもベテランでも起こりうる事故です。列車の少ない閑散線区でも多発しています。線路には必ず列車が来ると考えてください。

また、車両所や駅構内の列車の直前横断なども常に発生しています。運転台からは、近くの人ほど見えにくいのです。停止車両でも、突然動き出すかも知れないと考えてください。必ず立ち止まって、臆病なほどに、確認することが必要です。

●線路横断、線路内立ち入りの時は、必ず立ち止まって確認しよう！

- ・線路には必ず列車が来ると思ってください。
- ・どんなに慣れた場所でも、慣れた作業でも確認を！今日は列車が来るかも知れません。
- ・車両所や駅の構内では、運転士は自分が見えていないと考えましょう。
- ・停車中の列車もいつ動くかわかりません。常に、動き出す危険を想定してください。



抜本的な問題解決にむけて

そして、安全性をさらに高めるために、線路内作業は、線路閉鎖手続により列車が来ない状態で行うこと、固定式や携帯式の列車接近警報装置を整備し、安全の確保をバックアップすることなど、作業の仕組みの見直しやハード対策を強化することが非常に有効であることは明らかです。

私たちは、こうした環境改善の取り組みも精力的に取り組んでいくこととします。

5.2 感電事故を撲滅しよう！



仕事の前に確認しよう！仕事の合間に思い起こそう！

- 必ず停電を確認！ 停電だと指示されていても間違えることはあります！
 - ・絶対に検電・接地をしているかを確認しましょう！
- 活線近接作業では、停電箇所と通電箇所をしっかりと確認！
 - ・通電箇所には絶対に触れてはいけません！
 - ・感電防止の絶縁用保護具と安全帯を正しく装着しましょう！
- 「見る」「見られる」ことを気かけよう！ 危険を感じたら作業を止めよう！



なぜ必要なのか、何をするのか

すでにいくつかの事例を紹介したように、電気系統の職場において、感電は最も恐ろしい労災事故です。誰もが危険を認識し、注意しているはずなのですが、人間は必ずミスを冒します。電気は目に見えませんが、気付かずに触れてしまいます。停電手配のミスと検電・接地の失念が重なって感電したり、作業に没頭し、よかれと思って指示にない作業を行ったために、活線部分に触れて感電したりするケースが発生しています。

列車と同様に、臆病なまでに慎重に停電を確認し、検電・接地をしているか確認してください。たとえミスをして感電事故にはつながらないように、責任者と作業者がチェックし合ったり、活線には近づかせないための対策を講じることなども必要です。

また、活線近接作業が避けられない場合は、接触の危険のある部分にシートなど防具を装着すること、万一に備えて、手袋など絶縁用保護具と安全帯を正しく装着することが求められます。指揮者や責任者はもちろん、作業者もお互いにチェックすることが大切です。

●停電の状態は徹底して確認！検電・接地は絶対に！

- ・停電の手配がされている箇所が間違っている危険もあり得ます。通電している危険を常に疑い、停電を納得できるまで停電状態を確認しましょう。

●活線近接作業はとくに慎重に、ミスをしても活線に近づかない対策を！

- ・指示以外の仕事はしないこと、お互いに安全をチェックし合うことが大切です。
- ・思い違いをしても活線に近づかせない対策を。接触の危険を考えて、正しく保護具を装着し、危険箇所には防具もつけましょう。

このように、電気系統の作業は、多くの危険と隣り合わせの作業です。触車や墜落が合わせて発生する可能性もあります。まず、現場において、とにかく慎重に停電状態を確認し、たとえミスが起きても、感電事故につながらない対策を講じましょう。



抜本的な問題解決にむけて

感電事故の危険性を抜本的に抑えるためには、そもそも活線近接作業をしなくて済むよう、作業付近の電線をすべて停電させて作業することが一番です。しかし現実には、作業が輻輳^{ふくそう}して停電手配できない、停電には2～3ヶ月前の申し込みが必要で急な作業には対処できない、さまざまな系統の電線が混在して構造上すべてを停電させられないなど、多くの問題があり、現在のところ、活線近接作業は避けられない状態にあります。

しかし、必要な投資をして、危険な作業は段階的にでも改善すべきです。予算のあり方や工期の見直しなどで工事を平準化し、危険作業を減少させる方法もあるはずです。

概して電気系統の社員は、グループ会社、協力会社を含め、要員需給が厳しく、時間外勤務がきわめて長く、限られた作業時間や工期に追われた仕事を余儀なくされているのが実態です。作業の安全性を確保するとともに、要員や労働時間、作業時間や工期の問題などについても、積極的に改善を図っていく必要があります。

5.3 墜転落事故を撲滅しよう！



仕事の前に確認しよう！仕事の合間に思い起こそう！

●保護具・安全帯は正しく装着を！

- ・事故はロープの架け替え時に発生します。移動する時には絶対注意！
- ・補助ロープ（命綱）で常に身体を守ってください！
- ・「見る」「見られる」ことを気にかけてよう！とくに安全帯の相互チェックを

●危険を感じたら作業を中断！ 危ないままで仕事を続けてはなりません



なぜ必要なのか、何をするのか

J Rの職場では、多くの高所作業があります。墜転落事故が発生する背景としては、感電による墜落のほか、慌て作業や、いわゆる「近道行為」が挙げられます。

また、狭い足場や滑る床面など、悪環境の中での作業において、墜落や転落はいつ起こってもおかしくありません。危険な箇所や作業は、日々仕事に従事している作業者が最もよく把握しているはずです。危険を感じたらすぐに指摘し、対策を求めることも必要です。

そして、万一、足を滑らせたりバランスを崩したりしても、安全帯を正しく装着していれば、墜転落は防げます。感電事故の際に、感電が原因ではなく、安全帯を装着していなかったために転落し、その受傷が原因で作業員が死亡したケースもあります。

安全帯の装着はかなり徹底されていますが、高所における移動でロープを外した際に事故が多発しています。主ロープ（胴綱）を架け替える際には、その間は必ず補助ロープ（命綱）で安全を確保するのが基本ですが、これをしなかったために事故になっています。また、ロープを架けた位置が悪く、鋼材のボルトが外れて転落したケースもあります。

このように、墜転落事故防止のためには、まず、慌てたり、急いだりしている際、とくに昇降時や移動時には、一息入れて所定のルールを守るよう確認し、落ち着いて行動すること、危険を感じたら作業を中止し、改善を求めること、そして、必ず安全帯を正しく装着し、移動の際も、補助ロープ（命綱）を必ず架けて、常に安全を確保すること、また、作業員の安全帯の状態をお互いに確認し合うことが大切です。

●「慌て作業」「急ぎ作業」時にこそ立ち止まろう！

・高所作業では、とくに移動時や昇降時には一旦立ち止まり、安全確保を考えましょう。

●作業手順やルールを再確認してみよう！「近道行為」には危険が潜んでいます！

・決められた手順を飛ばす、確認すべきことを確認しない、指定の昇降手順を守らないなど、いわゆる「近道行為」には、必ず危険が潜んでいます。

●安全帯を必ず正しく装着しましょう！ とくに移動時の補助ロープ（命綱）を確実に！

・安全帯を装着していれば、墜落や転落は防げます。
・移動でロープを架け替える時に事故が多発しています。必ず補助ロープ（命綱）を架け、常に安全を確認してください。

●指揮者・責任者の皆さんは、作業の安全を見守ってください！

・工事指揮者、作業責任者など責任者の方は、高所作業者の安全帯の装着状況をチェックしましょう。安全が保たれているかを確認してください。

5.4 重大交通事故を撲滅しよう！



仕事の前に確認しよう！仕事の合間に思い起こそう！

●徹夜明けが眠いのは当たり前！

- ・眠気を我慢しないで、とにかく休もう！
- ・スピードは控えめに、安全最優先で！悪天候はとくに運転に気をつけよう！

●一人より二人、声を掛けたり交代したり、居眠り防止が大事です！



なぜ必要なのか、何をするのか

施設や電気関係の工務職場では夜間の徹夜作業が多く、担当する範囲の拡大に伴い、作業現場に自動車でも数時間も掛けて移動するケースも増加しています。工事指揮者の方などは、昼も打合せや作業準備などに忙殺され、仮眠をとらずに夜間作業に従事するケースもあります。年度末など繁忙期には、そうした状態が連続することもあるようです。

緊張の続く夜間作業の後には、疲労と睡眠不足で眠くなるのは当然です。そのような状態で自動車を運転していれば、きわめて危険であることは明らかです。過去にも交通死亡事故が発生しており、ほとんどの社員は、疲労運転によるヒヤリハットを感じています。

こうした交通事故を防ぐために、窓を開けたりガムを噛んだり、誰しも考えられる対策は行っていると思います。それでも眠い時や、危険を感じる時には、とにかく休憩するしかありません。早く帰りたいのは当然ですが、何よりも安全を優先させましょう。また、できる限り二人以上で乗車し、声を掛け合ったり、運転を交代するなど、眠気防止の対策をとりましょう。

●危険を感じたら休憩を！そして、二人以上の乗車で眠気を防止しよう！

- ・眠い、疲れたなど、危険を感じたら必ず休憩しましょう。仮眠をしてから、ゆっくり帰ってもよいのです。とにかく、安全を最優先してください。
- ・できる限り、二人以上の乗車に努めましょう。話をすれば少しでも眠気は低下します。疲れたら交代して運転しましょう。



抜本的な問題解決にむけて

誰もがヒヤリハットを感じているように、夜間作業後の交通事故は、いつ発生してもおかしくない状態にあります。こうした事故の防止に特效薬はありませんが、居眠りや疲労を少しでも低減させるための取り組みを真剣に講じていく必要があります。

そもそも、作業者本人が長距離運転をしなければならない体制を改善できないかを検討すべきです。複数での乗車ができる体制も考える必要があります。

また、仮眠をとれない、徹夜が続くといった体制について、背景や原因を明らかにし、工期の見直し、要員の増強などを含め、できることから改善を図らなければなりません。会社が、危険を感じたら休憩することを推奨し、むしろ休憩することを褒めるような風土を築いていくことも必要です。



過去にはこんな悲劇が発生しています！

事例 9 I 駅構内における触車死亡事故



当日は濃霧の中、コンパクター（つき固め機）による道床のつき固め作業などを行う予定でした。作業前のKYTでも濃霧や作業による騒音で列車の進来に注意することが確認されました。

当該の作業員は、この日は見張り担当でしたが、道具を取りに行く途中、他の作業員から機械の不具合を聞き、これを修理しました。機械がうまく動いたため、動作状態を試そうと線路内に立ち入って作業をしたところ、濃霧の中から電車が進来して触車し、命を落としてしまいました。

事例 10 J 車両基地構内における墜落事故

当該の作業員は、JR車両基地の構内で、電柱上に架けられたビームの上で塗料の塗布作業に当たっていました。高所作業にあたって、安全帯を装着し、胴綱をビームに掛けて作業を行っていました。

作業が終了し、作業員は胴綱を外し、本来は架けるべき補助ロープ（命綱）を架けず、安全帯に守られていない状態で、ビーム上から梯子に移動しようとしていました。そして、梯子に足を掛けた際、梯子が滑ってバランスを崩し、線路上に墜落して命を失ってしまいました。工事指揮者は、補助ロープ（命綱）の使用状況までは確認していませんでした。

事例 11 K県における夜間作業後の交通死亡事故

作業員 6 名は、5 時過ぎに K 県での夜間作業を終え、自動車に同乗し、作業現場から高速道路を経由して営業所に戻ろうとしていました。当日は雨が降っていて路面が濡れ、滑りやすくなっていました。なお、6 名の中で一番若い作業員が運転手を務めていました。また、後部にはシートベルトが装備されていませんでした。高速道路を運転している途中、ハンドルを取られ、左側ののり面に乗り上げて横転し、後部に座っていた 3 名が車外に投げ出され、2 名が死亡してしまいました。